

# JA魚沼 小千谷地区 「新之助」栽培暦

令和8年4月  
魚沼農業協同組合新之助研究会小千谷支部

## 【収量、収量構成要素 及び品質の目標】

目標収量	540kg/10a
穂数	400 本/m <sup>2</sup>
一穂粒数	70 粒
m <sup>2</sup> 当たり粒数	28,000 粒
精玄米粒数歩合	82%
千粒重	23.5 g
整粒歩合	70%以上
玄米タンパク質含有率	5.8% (上限6.3%)

注) 精玄米粒数歩合は玄米1.9 mm以上粒数/全粒数

## 【生育のめやす（稚苗育苗、5月中旬移植）】

生育ステージ	葉数 (葉)	草丈 (cm)	茎数(本 /m <sup>2</sup> )	葉色 (SPAD)
最高分けつ期（7月5日頃）	10.0～ 11.0	43～47	580～640	35～38
幼穂形成期（7月20日頃）	11.5～ 12.5	62～68	550～600	33～36
1回目穂肥時（7月23日頃）	—	66～72	530～570	33～36
2回目穂肥時（8月1日頃）	—	—	—	33～36
出穂期（8月13日頃）	13.5～ 14.5	稈長78	380 ～410	34～36

## 【品種の特徴】

- 「コシヒカリ」に比べ出穂期は6日、成熟期は7日、程度遅い晩生のうるち種
- 極良食味で高温耐性が強い
- 草型は偏穂数型
- 耐倒伏性はやや強、穂発芽性は中
- 千粒重はコシヒカリに比べ約1g 重い
- いもち病圃場抵抗性は、葉いもちがやや弱、穂いもちが弱
- 障害型耐冷性は弱

## 【食味・品質基準】

基準項目	基準値
農産物検査等級	1等
水分含有率	14.0%以上、15.0%以下
玄米タンパク質含有率	6.3%以下（水分15.0%換算）
網目	1.9mm

## 【主な作業と生育ステージ及び管理のポイント】

時 期	4月		5月		6月		7月		8月		9月		
	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下		
主な作業と 生育ステージ	播種		田植え		中干し (適期から遅れず実施)		最高 分けつ期	幼穂 形成期 穂肥	穂肥	出穂	通水最終日 に 十分かん水	落水は出穂 25日後以降	収穫 成熟期

ほ場選定と基肥施用	田植え	中干し・溝切り	病虫害防除	穂肥施用と登熟期の水管理	収穫・乾燥・調製
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 転作跡や圃場整備直後の圃場、秋落ちしやすい圃場での作付けは避ける。</li> <li>・ 出穂25日後まで、用水が確保できる圃場で栽培する。</li> <li>・ いもち病の発生しやすい圃場での栽培は避ける。</li> <li>・ 土壌診断に基づき、土づくりを行う。</li> <li>・ 基肥は、①分施では窒素成分で3～3.5kg/10aをめやすとし、②全量基肥では、穂数確保に必要な量とし、地力に応じて加減する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 田植えは5月中旬をめやすに行う。</li> <li>・ 栽植密度は50株/坪とし、過度な疎植は避ける。</li> <li>・ 1株苗数は3～4本をめやすとする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 中干し開始は、茎数が目標穂数の70%～80%（280本/m<sup>2</sup>～320本/m<sup>2</sup>）確保したら実施する。茎数が確保されない場合でも、遅くとも田植え1か月後には開始する。</li> <li>・ 溝切りは、中干し効果を高めるように必ず実施する。</li> <li>・ 中干し終了は、遅くとも出穂の1か月前までに終了する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 葉いもち防除は、必ず育苗箱施用を行う。また、育苗箱施用を行っても葉いもちを十分に抑えられない場合は、追加防除を行う。</li> <li>・ 穂いもち防除は必ず行い、特に、葉いもちの発生が多い場合には防除回数を2回とする。</li> <li>・ 斑点米カメムシ類防除は、畦畔等の草刈りと加害種に応じた薬剤防除を行う。</li> <li>・ その他病虫害も予防防除や発生に応じた薬剤防除を適宜行う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○ 分施での穂肥は窒素成分で合計2～3kg/10aをめやすとし、生育状況等により加減する。</li> <li>・ 1回目の穂肥は出穂期21～18日前（幼穂長が5～10mm）となった時期に施用する。</li> <li>・ 2回目の穂肥は出穂期12～10日前（葉耳間長0 cm）となった時に施用する。</li> <li>・ 生育がめやすを大幅に超える場合は、施用を控える。</li> <li>・ 異常高温等で栄養凋落が予想される場合は、窒素成分で最大で1 kg/10a以内の3回目穂肥を検討する。</li> <li>○ 全量基肥でも栄養凋落が予想される場合は、2回目の穂肥や3回目の穂肥を活用する。</li> <li>○ 出穂期25日後までは飽水管理とし、通水最終日には十分かん水する。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 収穫適期は黄化粒割合が85%～90%になった頃で、積算温度1,050～1,100℃程度をめやすとする。</li> <li>・ 乾燥は、<u>籾水分が14%以上、15%以下</u>となるよう、余裕を持って仕上げる。胴割粒の発生を防止するため、籾水分を確認し、適正温度及び適正速度で行い、<u>急激に乾燥させない</u>。</li> <li>・ 篩い目は1.9mmを使用し、整粒歩合70%以上となるように調製する。</li> <li>・ 調製後は玄米水分の変化に留意し保管する。</li> </ul>

GAPの取組 新之助GAPに基づき栽培し、5月・8月・10月にチェックシートを提出する。